

令和6年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書／事後評価書

団体名	公益財団法人高知県文化財団	
施設名	高知県立美術館	
内定額	9,728	(千円)

1. 基礎データ

(1) 開館日数・事業本数・貸館日数

項 目		令和5年度	令和6年度
開館日数		359	359
年間事業本数（※1）	主催事業	22	12
	公演事業	18	7
	（内、本助成対象事業本数）	0	3
	人材養成事業	1	2
	（内、本助成対象事業本数）	0	2
	普及啓発事業	3	3
	（内、本助成対象事業本数）	0	3
	その他 内容： 記入してください		
貸館日数	ホールごとの貸館日数	185	177
	ホール名： ホール 座席数： 393	185	177
	ホール名： 記入してください 座席数： 記入してください		
	ホール名： 記入してください 座席数： 記入してください		
	ホール名： 記入してください 座席数： 記入してください		
	ホール名： 記入してください 座席数： 記入してください		

※1 事業の延べ実施回数ではなく、事業本数を記入してください。

(2) 施設利用者数・利用率

項 目		令和5年度	令和6年度
施設利用者数（※2）	主催事業入場者・参加者数	8,521	5,016
	公演事業	7,093	3,149
	人材養成事業	47	43
	普及啓発事業	1,381	1,813
	その他 内容： 協力事業	0	11
	貸館事業入場者・参加者数	28,447	27,882
	その他 内容： 共催事業	2,646	1,555
	計	39,614	34,453
施設の利用率(%)		58.5%	79.0%

※2 実演芸術の公演等を鑑賞する者、ワークショップ等に参加する者、その他の劇場・音楽堂等の事業を利用する者の延べ人数を記入してください。劇場・音楽堂等のスタッフや、併設施設(美術館、図書館等)のみへの入場者数は除きます。

(3) 公演事業データ

事業種別		事業本数	公演回数	入場者・参加者数	入場者・参加者率	事業本数内訳						
						演劇	音楽	舞踊	伝統芸能	演芸	総合(※4)	その他
令和5年度	主催公演(※1)	18	38	5,556	40.0%	5	4		1			8
	共催・提携公演(※2)	3	36	2,570	－	33	2					1
	貸館公演(※3)	171	210	28,447	34.2%	4	108	14	17		4	24
	計	192	284	36,573								
令和6年度	主催公演(※1)	7	13	4,529	87.9%	1		1				5
	共催・提携公演(※2)	5	31	3,354	－	3			1			1
	貸館公演(※3)	161	206	27,882	34.2%	7	88	19	11		6	30
	計	173	250	35,765								

※1 名義主催は除きます。

※2 名義共催を含みます。

※3 「貸館公演」における「入場者・参加者数」及び「入場者・参加者率」は概算で構いません。

※4 「総合」には、フェスティバル等における事業数を記入してください。

2. 公演事業の実績記録と自己評価

(1) 各公演事業における評価項目「創造性・企画性」に関する評価指標・目標(値)

- ・ 令和6年度助成対象事業のうち公演事業について、助成対象事業ごとに自己評価を記入してください。

[illegible]

3. 自己評価

評価項目①：創造性・企画性

評価の観点
・(企画力)地域の状況と芸術性とのバランスが取れた、特色ある事業計画である。 ・(制作力)優れたアーティストやスタッフ等が才能や技能を発揮し、高い水準の作品制作や各種事業が行われている。 ・(発信力・影響力)圏域内外の実演芸術を牽引する成果が期待できる。 ・(レジデントカンパニー・アーティスト)当該劇場を創造拠点又は準拠点とする実演芸術団体やアーティストを擁する。 ・自由設定の観点(任意)

(1) 令和6年度の自己評価

- ・ 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら、事業類型ごとに自己評価を記入してください。

	評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
公演事業	・観客の満足度	・30代以下の有料入場者が15%以上	・公-1「カンパニー1927Roots」公演では入場者数561名に対し、有料175名(34.31%)がU30・U18チケット入場者。 公-2に関しては、小学生以下・中高生のチケットを販売したためアンケートの回答比率では20.0%で凡そこれに近い値と考える。 ・公-3「マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ「カルカサ」」公演では入場者296名に対し、有料48名(16.21%)がU30・U18チケット入場者。	・公-1「カンパニー1927「Roots」」公演にて県内唯一のデザイン専門学校と連携し、団体鑑賞として、20代の若年層の観劇の機会を創出するとともに、異ジャンルの芸術への関心を喚起することができた。また、U18チケットの設定により、親子で観劇する姿も散見された。 ・公-2「contact Gonzo Meets KOCHI 2024-2025」では、若年層・ファミリー層の来場を期待して企画を構成した。そのため、低廉な価格設定と子どもが騒いでも許容される環境を創出した。結果として、既にアーティストの評価を知っているコアなアート層だけでなく、本事業が新規ターゲットとした層が足を運んだ。来場者の反応として、若年層が「ダンス」「演劇」として定義される作品ではなく、「体験」「感覚」「遊び」としてパフォーマンスを受容していることを示す反応を得た。今後のアウトリーチ・教育普及の文脈でもこのような作品の持つ提起を活用したい。 ・公-3「マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ「カルカサ」」公演では、学校や習い事の団体へ訴求することで若年層の舞台への出会いを設定した。県内のバレエ教室や中学・高校・大学のダンス部への積極的な広報を行った結果、「よさこい」に代表される地域文化と親和性のある若年層のダンス愛好家や、指導者と生徒の来場が実現し、世代を超えた観劇の場が生まれた。	◇目標を「30代以下」としており、U30・U18チケットの来場者をカウントするのでは30代の観客が漏れてしまう。今後は測定方法を具体的に想定した上で目標を設定することが望ましい。 ◇公演事業1. カンパニー1927「Roots」(英国)公演は当該館の単独招聘、公演事業3. マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ『カルカサ』(ポルトガル)はロームシアター京都との共同招聘だが、いずれも招聘実務のノウハウとカンパニー公演を招致する高度な交渉力や制作力が必要となる事業であった。 ◇また、アニメーションと演劇が融合したカンパニー1927公演では、地元のデザイン専門学校生に向けてワークショップを行い、創造性を刺激した。またマルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ公演では「よさこい祭り」に象徴されるようにエネルギー溢るような躍りを好む若い世代に訴求するなど、作品やアーティストの特性に応じた関連企画や広報を展開した。 ◇以上のことから、当該館の長年の実績に裏打ちされた高い企画力、制作力、発信力が認められた。 ◇公演事業2. 「contact Gonzo Meets KOCHI2024-2025」は、当初は高知県内のリサーチを経てオリジナル作品を制作し、当該館の開館記念日である11月3日にプレパフォーマンス、2月に本公演を行う計画だったが、実施の段階で大幅な変更が生じた。2月公演「the storm」は文化人類学の視点を交えたアーティスト・トークを開催するなど意欲的な企画ではあったが、11月のプレ公演より入場者数が大幅減となるなど、事業の組み立てについて再考を要すると思われた。	
人材養成事業	・セミナー後の反応	・アンケートの記述回答が65%以上 ・「自分の活動での実践、意識づけに役立てられると感じた」が50%以上	・アンケートの記述回答：87.4% ・「自分の活動での実践、意識づけに役立てられると感じた」に対してSABCD評価を実施。「非常にそう思う」「そう思う」を選択した回答が100%	SABCD評価で「非常に役立つ」または「役立つ」との回答を全員が回答したため、高評価となった。このようなセミナーの機会がこれまで少なく、知識の取得はもちろん、実務に直結するというセミナーの有益性が実感できたことが評価の高さにつながっている。 評価検証編では、第1回目の自由記述としては「学びがあった」「評価の重要性を感じた」など概念的な意義についての感想が多い傾向にあったが、第2回目は実践的な内容であったため「自分もやってみたい」「●●の評価方法も知りたい」など実務として捉える書きぶりへと進んでいる。 労働環境編においては、「財団の様々な職種の人に受けてもらいたい」「このようなセミナーをまたやってほしい」など、機会の提供についての声が複数上がった。 いずれのセミナーも15名程度の寺子屋感のある規模であり、同業者が多いという安心感も相まったため、質疑も気軽にしやすく来場者の満足度向上につながったと思う。 満足度の数値としては公演事業より高いが、内容から見る成果としては妥当であると考える。今後、回答結果が多少下がったとしても遠方の従事者や民間の指定管理者等の参加を増やしていくことで、必要なノウハウや知識を共有する輪を広げていくことが重要だと考える。	◇人材養成事業1. 2「アートマネジメントセミナー(評価検証編、労働環境編)」は、担当者の明確な目的意識のもとに企画された事業である。高知県内の主要な劇場関係者の他、県外からも参加があり、かつ当該館の職員も多数参加するなど効果的な運営がなされた。時機を捉えた重要なテーマだったこともあり、参加者が自分事として考え、参加者同士の意見交換なども活発に行われた点が有意義であった。 ◇今後も地域の現状やニーズを分析し、オンラインなども活用して専門人材の能力向上に貢献されたい。	
普及啓発事業	・参加者の反応	・「また鑑賞(体験)したい」が65%以上	・SABCD評価のSおよびAの回答数 普-1「いざなぎ流御祈禱神楽」回答者272名のうち、Sは63.6%(173名)、Aは29.4%(80名)で、あわせて93%(253名)の方から「また鑑賞したい」との評価を得た。 普-2「出前演劇教室」実施2校の計61名のうち、Sは90%、Aは10%と高評価を得た。 普-3「出前クラシック教室」実施4校の計176名のうちSは90%、Aは8.6%と高評価を得た。	普-1「いざなぎ流御祈禱神楽」では「地域に足を運んで鑑賞したい」「存続のために協力したい」など、今回の公演をきっかけに継承や支援につながる反応が多くあった。あわせて「難解なイメージがあったが、学芸員の解説のおかげで内容の理解がしやすかった」「資料が充実していた」といった、解説や資料があることでより理解が進んだとの普及啓発のアウトカムとして期待していた回答が得られた。また、県外からの入場者が18.3%(四国内 45.6%、四国外 54.4%)で、高知県の観光振興にも寄与することができた。 普-2「出前演劇教室」では「楽しかった」だけでなく、「またやりたい」「続けたい」「来年も」といった継続を求める意欲的な反応や、「もっと上手になりたい」といった向上心や自己成長を感じられる記述が多く見られた。 普-3「出前クラシック教室」では、S「とても良かった」は92.9%、A「良かった」は7.1%と高評価であった。児童・生徒の感想としては、「音楽はいろんな音が混じることですごく感動を与えてくれることがわかった。実際に目の前で聞けて本当に良かった。」「きれいな音色で、いろんな楽器が出てきて楽しかった。吹奏楽部をやめてしまったけどまた、高校で入ってフルートを吹きたいと思った。」など、鑑賞を自分の感情や体験と重ねて感想を伝えるケースが目立った。	◇当該館は2018年から毎年正月に国の重要無形民俗文化財である「土佐の神楽」を上演しているが、2025年1月3日に実施した「いざなぎ流御祈禱神楽」には、当初の想定を大幅に超える来場者があった。また内容に対する高い評価からも、お正月神楽が地域の人々に郷土芸能の価値を再発見する機会になっていると同時に、広く県外からも注目されていることがうかがえる。 ◇カンパニーデラシネラの出前演劇教室は、藤田桃子が高知県出身である縁で長年に渡り継続開催されている。経験豊富なアーティストによるきめ細やかなプログラミングとファシリテーションで、児童生徒が楽しみながら身体表現を体験し、大きなインパクトを与えていることが認められた。「またやりたい」「もっと上手になりたい」といった声から、子ども達の創造性が刺激されたことが窺える。可能であれば、体験終了後にアーティストと参加者との意見交換(子ども達の感想を聞く等)が行われると、更に体験が深まると思われる。 ◇出前クラシック教室には、高知で活躍する「アンサンブル・パレット」の5名が起用されている。特に特別支援学校では生徒の状況に柔軟に対応し、普段は見せない表情や反応を引き出した点は、アウトリーチの成果である。	

(2) 「創造性・企画性」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

公-1「カンパニー1927「ROOTS」」公演に付随して実施した関連プログラムの充実は、世界の第一線で活躍するアーティストの創造性や手法への理解を深めるだけでなく、公演以外の場においても観客の関心に寄り添いながら、創造的な意欲を喚起する役割を果たしたことで、舞台芸術に関心の薄い層にもリーチすることができた。とりわけ、県内で唯一のデザイン専門学校と連携し、グラフィックデザイン専攻の学生を対象に行った「演劇×アニメーション」ワークショップでは、日頃の制作活動に“演技”という身体的表現を取り入れることで、表現の柔軟性や拡張性に対する新たな視点を提供することができた。これにより、参加学生の創作活動における想像力と企画力の向上が促されるなど、将来的な創作の展開にもつながる実践的な成果が得られた。
公-2「contact Gonzo Meets KOCHI 2024-2025」では高知では馴染みの薄い、実験的な作品性を伝えるため、広報では動画や写真を多用した展開を行った。文章で理解が深まらない内容も、視覚的に訴求し、美術館・アーティストのHPやSNSを中心に広報することで、内容への関心を喚起する狙いである。訴求したい若年層の生活の中で自然に広報を目にするよう計画した。
普-1「いざなぎ流御祈禱神楽」神の由来を語る祭文、神々の形を切り絵で表現した御幣など、多様な要素を持つ祭事儀礼「いざなぎ流」。非公開で行われることの多い儀礼を解説付きで上演する貴重な機会になり、意味や背景まで含めて知っていただけた。アンケートでも「地元の大切な文化でありながら触れる機会がないため、とても貴重で有難い公演だった」「解説付きで非常にわかりやすく、背景まで理解できた」などの声があった。また、今回の公演を機に保存会に参加した方が数名おり、継承につながる契機となった。
普-2「出前演劇教室」カンパニーデラシネラの小野寺修二氏と藤田桃子氏を講師に迎え、パントマイムによる非言語の身体表現を体験する演劇教室を実施。児童たちは動きを真似したり、他者の動きを観察し演劇的に解釈する中で、身体表現の魅力と奥深さに触れた。東京から講師が訪れたこと自体が非日常的な体験となり、実施校のある山間部や郊外の児童に大きなインパクトを与え、都市と地方の文化格差を埋める意義深い取り組みとなった。アンケートでは、「本当に壁があるようだった」「人形みたいだった」などの感想からも、プロの技術がしっかりと伝わったことがわかる。特に、「触られたら止まる／動く」「人形の真似をする」といったシンプルなルールが想像力や観察力を引き出し、誰もが参加できる演劇表現の可能性を広げた。また、「休み時間にもやっている」「人形と人間になる遊びが楽しかった」など、児童の創作意欲の高まりが見られた。演劇が日常の遊びとして自然に広がり、継続的な波及効果が期待される。ペア・グループワークなどの協働的な実践やクラスメイト同士や講師であるアーティストに「褒められた」経験は自己肯定感の向上にも寄与し、子どもたちが芸術を身近に感じるきっかけともなった。2026年度実施予定の劇場公演と学校巡回によるシリーズ第3弾の新作制作に向けても、本取り組みは重要な事前ステップとなった。
普-3「出前クラシック教室」高知で活躍する演奏家5名アンサンブル・パレットの名前のとおり、いろいろな音色を色にみ立て、パレットの上での音の重なり合いを感じてほしいと演奏を続けている中で、「パレットの上で絵の具を混ぜるような演奏で好きになった」との感想をもらい、しっかりと伝わっていることを実感できた。特別支援学校では、教室には入れない、質問がとまらない、座ったままでいられない等、生徒の様々な聴く姿勢に柔軟に対応したことで、先生からも生徒の初めて見た表情や反応を感じられたと感謝の言葉をいただいた。遠方の学校では、生徒は初めてみる楽器も多く、喜んでくれるのはもちろんのこと、先生にとっても癒しの時間となることで、この事業の目的の1つでもある。

評価項目②:国際性(任意)

評価の観点
・(国際プレゼンスの向上)海外の劇場やフェスティバル、実演芸術団体等と連携し、国際共同制作や海外作品の招聘等に取り組んでいる。 ・(国際交流)アーティストや文化芸術関係者の招聘等、人的交流や情報交換が行われている。 ・(新たな創客への取組)在住外国人や訪日外国人に向けて文化芸術体験の機会を提供する等、グローバルな視座で創客に取り組んでいる。 ・自由設定の観点(任意)

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
・観客の反応	・「視野が広がった」「新しい意見や世界に触れられた」など多様性や異文化寛容性についての自由記述が演目ごとに10(1公演の場合は6)名以上のアンケート回答	ROOTS(カンパニー1927) 多様性・異文化・世界観に触れたと感じられる自由記述: 45件/ 369名回答 「不思議な世界観で奇妙な気分にはせられた。アニメーションと一体化してとても面白かった」(60代・女性) 「日本ではみられない感性におどろきと面白さを感じました。世界に通じるユーモアセンス、色々と勉強になりました」(20代・女性) 「文化が異なるためか理解が追いつかない部分もあったが、映像と演劇の組み合わせで無限の表現が見られて楽しかったです」(30代・女性) Carcaca(カルカサ) 多様性・異文化・世界観に触れたと感じられる自由記述: 9件/ 50名回答 「多様性や差別などが今ある社会問題などが表現されている感じがして、自分自身とても考えさせられる舞台でした」(10代・女性) 「初めて大きなコンテンポラリーの舞台を見たが感動した。多様性やファシズムなど、歴史的に考えさせられる舞台であり、今までに観たことのない構成だった」(10代・女性) 「全く知らないダンサーさんたちでしたが、日本初上演に高知?と驚き、心が動かされた」(40代・女性)	・公-1「カンパニー1927「Roots」」は、精緻なアニメーションと演劇が融合したシュールでユーモラスな作品であり、視覚的完成度の高さや異文化的感性が多くのお客様に強い印象を与えた。「非日常的な世界観」「日本では見られないユーモア」への感動や興味深さを表現する感想が多数寄せられ、作品の多層的な意味や背景を汲み取る受け取り方が目立った。 また、プレビューがあったことで、複数回の来場や県外からの観劇も見られ、演劇や映像芸術に対する関心が高い層に強く刺さる内容であったことが示唆される。 ・公-3「マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ「カルカサ」」は、肉体性とエネルギーに満ちたコンテンポラリーダンスを主軸とする作品であり、特に10代～30代の観客から「初めて観るダンス」「迫力があった」「体力がすごい」といった身体的なインパクトへの強い反応が多く寄せられた。海外で評価の高まりつつある公演を地方都市で紹介できたことは、「世界への窓」を開く一助となった。 ・公-2「contact Gonzo Meets KOCHI」では、「初めて観る表現」「子どもが集中した初体験」といった声が寄せられるなど、身体表現の新規性に対する反応が見られた。アウトプットとしてのアンケート記述では国際性や多様性についての言及はないが、ホーチミンでR7.7にワークショップを経て上演する計画が進んでいる。 海の波という普遍的なテーマかつ、ポータビリティのある作品を作ったこと、言葉を用いず特定の身体技術を要求するものではない、という本作の特色ゆえであり、今後グローバルな展開が長期アウトカムとして表れると考えている。	◇評価指標で「自由記述」の件数を数え内容を検証したことは、当該館独自の視点といえる。 ◇招聘作品である『ROOTS』や『カルカサ』公演は、いずれも目標値を達成し、観客のコメントからは作品のテーマがしっかり伝わっていることが見て取れる。特に『カルカサ』はエネルギーギッシュなダンス作品であると同時に様々な問題を提起する内容であるが、これは当該館が長年、ダンスを中心に国内外の先鋭的な舞台作品を招聘してきた蓄積から、世界の多様な表現やメッセージを感受する幅広い観客に支持されている証左であろう。 ◇特に『ROOTS』公演の関連事業として、デザイン専門学校生との交流が行われた点は、若者に異文化と触れる機会を提供し、意義深い。 ◇「contact Gonzo Meets KOCHI」の2月公演『the storm』は、イマジナリーな海(寄せては返す波)を身体や声を使って集団で再現するシンプルなパフォーマンスである。日本の古の固有信仰(自然への畏敬)や「神遊び」といった文化的背景を紹介したり、劇場制度へのアイロニーといった思想を打ち出すなど、パフォーマンスとしての強度を増せば、モビリティは高く国際性のある作品になる可能性はあるだろう。 ◇『the storm』高知公演における国際性は、観客が国際的に活躍するアーティストの実験的な表現に出会うという点にあったと思われるが、観客数が少数に留まったため、その効果は限定的となった。 ◇四国という地方都市にありながら、時にスタッフが海外フェスティバル等へ赴き、直接ブックイングするなど、独自性や主体性を発揮してきた点は高く評価されるべきである。同時に、今後は当該館が招聘した作品を国内の他都市にまわす営業努力が、これまで以上に必要になるだろう。 ◇また、今後は在住外国人や観光客を積極的に呼び込む試みにも期待したい。	

(2) 「国際性」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

・海外招聘公演であった公-1「ROOTS」の開催にあたり、依頼した舞台芸術系の通訳者に加え、高知県の国際交流員にも協力を仰ぎ、公演の周知やワークショップでの通訳を依頼した。 県庁での業務は書類や広報物作成時の翻訳などが多く、交流員のポテンシャルを十分に活用できるものではなかったが、当事業への協力依頼で新たな活動の機会を創出することができた。
・公-1「ROOTS」では、プレビュー公演の後、来場した専門学校生(団体鑑賞)向けのバックステージツアーを実施した。上演後にアーティストらと交流する際、学生らは緊張していた様子だが、徐々に質問を投げかけたり感想を伝えたりする様子が見られた。英語での交流は難しい様子であったが、通訳を交えて遣り取りするなど、国際交流の萌芽がみられた。
・公-2「嵐前夜の水バシャバシャ！ 荒木優光とコンタクト・ゴンゾの中庭サウンドカーニバル」では、シンガポールのアーティスト、チョイ・カファイ氏がcontact Gonzoの活動をドキュメントし自作として発表したいとのことで、当館での公演にも同行した。 カファイ氏のSNS等でも当公演について広く周知され、幅広い分野で活躍するアーティストとの新たな出会いの場が創出された。

評価項目③:地域文化拠点機能

評価の観点
・(文化拠点)地域の特性やニーズを踏まえ、地域の文化資源を活用するなど、地域の文化拠点として事業が組み立てられている。 ・(地域連携)地域の関係機関と連携・協力し、地域コミュニティの創生や社会課題の解決等に取り組んでいる。 ・(児童生徒への機会提供)次代を担う子ども達を対象とした鑑賞や体験事業が行われている。 ・ホール利用サービス(貸館事業)の向上 ※ ・自由設定の観点(任意)

※ ホール利用サービス(貸館事業)を行っていない場合は不要

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評定	所見	対応・追加情報など
・ボランティア(カルチャーサポーター)の稼働日数 ・ホール利用者へのアンケート	・36日以上(月3回以上) ・利用満足度(改善要望なし)が95%以上	・カルチャーサポーターの活動日はのべ32日 ・ホール利用者アンケートでの利用満足度は98.5%	・36名の登録者があり、資料整理やワークショップの補助などの活動を行っている。カルチャーサポーターの活動日数は目標にわずかに及ばなかったが、前年度はコロナの影響もあり5か日だったことから比べると、活動をコロナ前まで復活させられたと考えている。 一方で、サポーターの高齢化により立ち作業や体力を使う作業を敬遠する方が多く(サポーターの年齢中央値は60代後半～70代)、抜本的な体質改善を図る必要がある。 ・利用者アンケートでは、設備の老朽化等に対する意見・指摘が3件あった。好評をいただいたのは細やかな対応や、電話での劇場打合せなど、利用者の労力の軽減に対するものが多かった。当館の利用団体はピアノ教室や映画の市民団体、幼保園などが多く、プロモーターや商業系劇団をはじめとする上演活動に慣れている利用者が少ない傾向にある。そのため、発表活動においても要望を実現化するサービスと、来館しての打合せについての時間を捻出できない(半面、パターンの定まっている発表会)に対しての対応力で、安全を担保しつつ利用者満足を上げている。 アンケート回収率は50%で、年に複数回の利用があるヘビーユーザーからのアンケート回答が低い傾向がある。また、現在のところ、アンケートの聴取は任意としているが、慌ただしい退館時のアンケート改修は利用者の負担増にもなりかねない。期間を定めての悉皆調査などを検討したい。 一方で、今回はアンケートの回答を成果指標としたが、記述に残らないご指摘は散見される。中にはカスタマーハラスメントに類されるものも多く、難癖をつけて対応する職員を次々交替させる、高圧的な態度で職員を萎縮させる、などの行為も見られる。当館の実状として一般職員で対応せざるを得ない状態である。数値化されないお客様対応にこそ今後の改善が必要であると感じている。	◇カルチャーサポーターの活動が復調した点は良かったが、自己評定に記述されている通り、若い世代のボランティアの取り込みや活動内容の見直しなどを図ることで、各種事業への参加者層の拡大につながることを望ましい。 ◇貸館事業は地域文化拠点として重要な機能であり、ヘビーユーザーからも回答を得られるよう、既述されているように一定期間の悉皆調査なども今後検討されたい。 ◇下記「エピソードやグッドプラクティス事例」に記述されているとおり、当館が地域の文化芸術活動者のネットワークのハブとなっている点は、公演事業のように目立つものではないが、場所を有する文化施設の重要な働きである。今後も一つ一つの関わりを大切に、地域文化拠点としての存在感を示していただきたい。 ◇2月の意見交換の場で、「出前クラシック教室」を実施した学校の先生が、アンケートを翌日車で2時間かけて持ってきてくださったというエピソードをお聞きた。また公演等調査では、高知県は四国で最も面積が広く、人々の暮らす地域を県土の8割強を占める森林が隔てているため、県庁所在地から離れた地域に積極的にアウトリーチしているとの報告があった。当館は公演事業が目目されがちだが、施設にアクセスしにくい地域の子ども達や先生方に良質な鑑賞・体験の機会を提供している点も高く評価されるべきだろう。 ◇なお、東京からアーティストがやってくること自体が非日常的な体験であるとの記載もあったが、実施校を増やすためにも、今後は地元でワークショップのできるアーティストの発掘や育成がなされることを期待する。	

(2) 「地域文化拠点機能」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

・共催事業を行う地域での文化振興の担い手の中には、当館の公演に出演経験のある方や、当館での勤務経験のある方もおり、当館の自主事業を契機にノウハウを広く地域活性化に活用している。今年度は地域でアーティスト・イン・レジデンスや海外招聘を実施している団体を支援し、当館のホールでの公演を実施した。

・当館が過去に実施した事業が好評を得たことで、(きむらとしろうじんじん氏の「焼立器飲茶美味窯付移動車・野点」)を自団体でも実施したいと地元の飲食店から申し出があった。事業実施のセレンディピティの一つであると捉え、野点に必要な準備スペースとして、その時期に空いていた創作室を準備エリアとして提供した。事業に地元人材が参画するだけでなく、当館を信頼し、相互連携ができる相手として認識してくれている証左であると考える。

評価項目④:多様性とアクセシビリティ

評価の観点
・(プログラムの多様さ)プログラムの種類や形態が多様で、幅広い観客や参加者に訴求する。 ・(参画者の多様さ)アーティストやスタッフとして参画する人々の属性(性別、年代、居住地、他)が多様である。 ・(アクセシビリティ)障がいの有無や年齢、性差、国籍、居住地、経済的状況等に関わらず、あらゆる人々と実演芸術をつなぐため、施設の構造・設備上の配慮、プログラム上の創意工夫やサポート、アウトリーチ等が行われている。 ・自由設定の観点(任意)

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
・30代以下のアンケート回答数	・8%以上	公-1「カンパニー1927」Roots」公演では入場者数561名に対し、30代以下のアンケート回答数は29.59%(166名) ・公-2「嵐前夜の水バシャバシャ！荒木優光とコンタクト・ゴンゾの中庭サウンドカーニバル」では30代以下は28.9%(アンケート回答数45名のうち13名)。 「the storm」は64名に対し、30代以下は20.6%(アンケート回答数34名のうち7名)。 公-3「マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ「カルカサ」」公演では入場者296名に対し、30代以下のアンケート回答数は13.17%(39名)	1. ROOTS(カンパニー1927) 多様性: ヨーロッパ各地の民話を基にした物語のメドレーを通じて、異なる文化や価値観を紹介。視覚的・言語的融合による多文化理解を提起した。 アクセシビリティ: 英語上演に日本語字幕を付けることで、言語の壁を越えた鑑賞体験を提供した。 2. contact Gonzo(the storm / 中庭サウンドカーニバル) 多様性: 地域住民を巻き込んだワークショップや、自然現象をテーマにしたパフォーマンスを通じて、多様な視点や参加を促進。空間・観客の自由度を活かしたアクセシブルな設計を実現しており、結果として、年齢・文化的背景・舞台経験の有無を問わず多くの観客が“届いた”体験となった。 アクセシビリティ: 観客が自由に移動できるスタイルや、子どもも参加できる公演形式により、幅広い層が参加しやすい環境を提供した。 ワークショップ参加者からは、「高知県立美術館の取組みならばと参加した」「他の地域との連携や協力で県下全域でこのような企画をして欲しい」等の声が聞かれた。 3. Carcaça(マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ) 多様性: 多様なバックグラウンドを持つダンサーたちが、異なるダンススタイルを融合させ、文化的多様性を表現する機会となった。 アクセシビリティ: 身体表現を中心としたパフォーマンスにより、言語に依存しない鑑賞体験を提供し、身体表現を通じた社会的多様性の提示した。 上記の公演を実施することにより、視覚的な演出や身体表現を通じて、言語や文化の壁を越えた鑑賞体験を提供しました。これにより、当館が従来の来場者として確保している中高年層に加え、新たに若年層を含む幅広い観客が新たな視点や異文化理解、多様性を体感する機会を得ました。 これらの取り組みは、高知県が掲げる「文化芸術の力で心豊かに暮らせる高知県」という基本理念にも合致しており、今後も若者が高知で文化に触れられる環境を整備し、多様性やアクセシビリティを重視した事業を推進していきます。	◇2月に行った意見交換で『ROOTS』公演ではすべての印刷物を日英併記にし、普及啓発事業『いざなぎ流御祈禱神楽』では「やさしい日本語」の解説を配布したといったことも聞いた。また、美術館の展覧会では「フレンドリーアワー」という、赤ちゃん連れや声が出てしまう人も気楽に鑑賞できる時間帯を設けているとのことであった。アクセシビリティを高めるためには、着手できることから一つずつ取り組むことが肝要である。今後も美術館事業との相乗効果で、より幅広い層に親しまれるような施設運営を望みたい。 ◇contact Gonzoによる公演事業2. は、いずれも既存の劇場機構に囚われず、サイトスペシフィックな趣向あるいは舞台と客席の枠を超えた形式で上演された。いわゆる観劇マナーにも縛られない包摂性のある上演形態となった。また『the storm』では地元の参加者6名が2日間のワークショップを経て公演に出演した。 ◇当該館が課題としている若年層は手軽に楽しめる映像コンテンツに慣れ親しんでおり、ライブ・エンターテインメントの敷居はあらゆる面で高くなっている。今後も地域の若者が一人でも多く当該施設を訪れるよう、文化芸術事業はもとより、コミュニティセンターのような多領域を横断する試みを行うのも一案ではないか。芸術愛好家以外の層に施設に足を運んでもらうためのきっかけづくりが、今後ますます必要になると思われる。	

(2) 「多様性とアクセシビリティ」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

(プログラムの多様さ) ・従来は土日に公演を実施していたが、平日の昼(プレビュー)や夜公演を実施した。高知県の自営業者率は全国2位であり、週末には劇場に行きづらい層が一定数いることを考慮した。結果として、新規層を開拓できたほか、来場したことのある観客の中にも、「平日の方が都合が付きやすい」という声も上がった。慣習的な日時設定を再考したことで、多様な働き方や暮らしに対応できることを実感した。また、学校等の団体鑑賞も受け入れやすかった。
(参画者の多様さ) 公-2「嵐前夜の水バシャバシャ！ 荒木優光とコンタクト・ゴンゾの中庭サウンドカーニバル」では、立見での鑑賞が前提であったが、美術館回廊にベンチを10台配置し、座布団代わりのシートクッションも貸出配布した。車いすやベビーカー用のエリアも設けた。結果として、乳児を連れた家族や高齢者も含め、見やすいエリアを見知らぬ人に勧め合ったり譲り合う様子が見られ、観客同士が交流しながら和気あいあいと鑑賞する和やかな鑑賞体験となった。 「the storm」は、客席を移動しながら鑑賞することのできる公演であった。音にフォーカスした公演で、未就学児も入場可としていたが、動き回ることでの他の観客がノイズとなる不満が減り、赤ちゃんが騒いだりすることも気にせず楽しんでいただけた。階段に寝転がって観る／聴く人も居り、難解なコンテンポラリーアートを年齢や知識にかかわらず楽しんでいただけた。
(アクセシビリティ) ・美術館の来場者の例だが、展覧会の鑑賞の際、サラートの場所を貸してもらえるか、という問合せがあった。また、宗教上の理由で女性に対応されるのは困る、ということであった。同内容で同一人物から複数回問合せがあったため、職員が情報共有し、誰が電話を受けても同じ回答ができるように周知徹底した。サラートのために、一般来場者が入らないスペースを解錠して使えるようにした。来館日にはシフトの都合で男性職員が出勤しない予定だったが、勤務予定を調整し、男性職員が案内できるよう合意的配慮をはかった。 ・公演前に実施したワークショップが、発達障がいの子どもの来場を検討していた保護者にとって、公演の内容をあらかじめ知る機会となり、先の見通しをつけられることによって安心し、鑑賞に踏み切る切っ掛けとなった。 ・公-1で、英語のナレーションに日本語字幕をつけたところ、聴覚障がいのある来場者から「台詞が聞き取れなくても、内容が伝わって良かった」と感想を頂いた。 ・公-2「the storm」は地域のリサーチを行いながら作品を作る公演であった。この企画に参加した県外出身・在住の20代のワークショップ参加者が、高知に魅力を感じ、移住を考えているため就職活動を高知で行い来春からの就職が内定した。

評価項目⑤: 自由設定(任意)

①創造性・企画性、②国際性、③地域文化拠点機能、④多様性とアクセシビリティ、⑥運営体制と持続可能性 の項目では成果や課題に言及しきれない事柄について、自己評価を行ってください。

評価の観点

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など

評価項目⑥:運営体制と持続可能性

評価の観点		現状	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
「実現性」の評価項目より							
(ア)	(多様な財源の確保)予算計画が妥当であり、事業収入のほか、各種助成金や寄附金・協賛金等の獲得に努めている。	財源については、県からの指定管理料、事業収入及び助成金等を主要な財源としており、物価高騰等の影響もあり、近年厳しい予算計画の策定となっている。	各種助成金について、10,000千円を目標値とする。また、属性分析に基づいたチケット料金の設定を行う。	劇場・音楽堂の他にも、助成金を1,640 千円交付頂き、目標額を達成した。属性分析については部分的に実施した。	目標額は達成でき、属性分析については試行錯誤しながら実践している。今後は民間助成をはじめさらに多様な財源の確保に取り組む必要がある。	ホール事業に留まらず、運営財団としての包括的なファンドレイズや資金調達の多角化への取り組みに期待したい。	
(イ)	(広報・営業力)広報計画が充実しており、券売や集客、会員制度等の拡充に努めている。	ホームページやSNSでの情報発信に努めており、一定の券売・集客につながっている。会員制度等は今後の課題である。	事業ごとにターゲットを定め、オンラインチケットの販売を始め、多様な券売形態を試みる。	券売形体の多様化および会員制度について、会議等で話題に上がっている。	多様なメディアを駆使した広報活動を実践しているが、ロジカルな分析や戦略が必要。広報の多様化が疲弊を招かぬよう注意しながら、特に青少年向けの割引会員制度について財団全体で検討する。	2月の意見交換で、美術館の会員制度が廃止された経緯をお聞きした。青少年向けの割引会員制度が具体化することを期待する。	
(ウ)	(他館連携)他の劇場・音楽堂等との事業連携や協力・支援を通じて、効果的で効率的な事業運営を行っている。	世界の優れた舞台芸術の共同招聘に他館と連携して取り組み、効率的な事業運営を図っている。	国内外の劇場・文化セクターと連携した共同招聘・共同製作に取り組む。県内の他施設と連携した事業運営を実施する。	他館連携については、国内外各1館と連携した公演を実施した。また、前述の公演の再演についても国内他館と調整中である。	芸文振PD,POからの助言を受けて、国内外の連携について意識づけがされ始めた段階である。次年度事業についても連携体制を敷いており、継続していく。	館の独自性や主体性を大事にしながら、効果的な事業連携が図られることを期待する。	
(エ)	(設置者)円滑な事業の継続のため設置者と適切に意思疎通を図っており、設置者による人材や財源の確保等が期待できる。	設置者である県から指定管理を受けている高知県文化財団と緊密に連携しながら、必要な人材の募集・確保、また必要な財源について適宜相談している。	高知県の所管課である文化国際課だけでなく、事業特性に応じ様々な部課と連携を図り、周知・協力体制を構築する。	文化国際課の職員が公演事業に足を運ぶ(自費・招待含む)など、これまでにないコミットメントの実績が生まれている。	文化国際課のほか、国民文化祭課・広報広聴課・建築課などとの意思疎通を図っており、県公報や修繕についての情報共有などが円滑に進んでいる。	所管課以外の部課との意思疎通や交流も重要であり、今後も継続されたい。	
「持続可能性に関するチェックシート」より							
(オ)	(芸術監督)芸術監督等、劇場運営の芸術面を統括する人材が配置されている。	美術部門・舞台芸部門を統括できる人材(美術館長(学芸員))を配置している。	必要な人材の育成・登用を行い、不足の場合は専門知識を持った外部人材への相談・助言の依頼を実施出来る体制を構築する	美術館が擁する劇場という特性を活かし、館長の学芸員的知見から分野横断的な事業への積極的な取り組みを行った。	指針や劇場法に駆われている専門人材についても、学芸員同様に確保・育成していく必要があり、この意識を館全体で共有していく。	今後も館長のイニシアティブで、分野横断的な取り組みが推進されることを期待する。	
(カ)	(長期的経営)長期的視点に立ち、劇場運営を統括する、経営実務者が配置されている。	美術部門・舞台芸部門を統括できる人材(美術館長(学芸員))を配置している。また、予算管理及び執行を統括できる人材(副館長(行政経験者))も配置している。	劇場を有する美術館として、学芸員等の専門職員を適切に配置する	経営実務者の配置は館全体としても必要性を共有していく必要がある。	離職率が低いため、早急な雇用は見込めないものの、流動性の高い管理職ポストに経営実務者を配置するなどの計画を検討する。		
(キ)	(専門人材の確保)今日的な劇場運営に必要な職能や専門性を踏まえ、運営体制が整備されている。あるいは専門人材の確保や育成に努めている。	舞台や映画芸術に精通した職員を配置している。	職員の世代交代を視野に入れた体制作りについて具体的な方策・計画を策定する。	体制づくりについては検討の準備的な段階である。人材養成は公文協の研修の機会を活用して実施した。	事業運営だけでなく、ロジックモデルの構築、大規模改修を含めた総合的な劇場運営を担える若手人材の育成が急務である。		
(ク)	(職制の整理)芸術監督、館長、支配人、プロデューサー、その他管理職の職位及び職能、一般職員の職務内容等が専門性を基に整理され、役割分担されている。	専門性を基に整理し、役割分担している。館長(学芸員)副館長(行政経験者)チーフ(舞台専門人材)一般職員(舞台・映画専門人材)	専門人材の職能及び特性を鑑みた人員配置が出来るようガバナンスの効いた執務環境を整え、研修機会を担保する。	学芸部門の整備は為されている。劇場担当課の管理職は総務と兼任である。事業検討については課員及び館長が協議して行う。	一定の評価はできると考えている。今後は役割分担とガバナンスに留意した人材配置が必要である。		
(ケ)	(世代間バランス)年齢バランスを考慮した人材確保を行っている(若年層の雇用に努めている)。	再雇用職員を除き、チーフ以下全員40歳代である。	引き続き、年齢バランスも考慮しながら対応していく。	館長・副館長・再雇用職員(60代)、その他の劇場担当職員(40代)で変化なし。	契約職員も含め、各世代が着実に活躍できる環境を整えている。引き続き若年層の雇用を意識し、全体の年齢バランスを考慮した人材確保を行っていく。	持続性の観点からも、引き続き若年層の雇用を検討されたい。	
(コ)	(ジェンダーバランス)女性管理職比率が30%以上である。あるいは、女性の管理職やリーダー職への登用に努めている。	過去には課長級の女性職員(定年退職)もいたが現在は管理職はゼロとなっている。過去には課長級の女性職員(定年退職)もいたが現在は管理職はゼロとなっている。なお、令和6年7月1日付けで女性をはじめて副館長に登用予定である。リーダー職として、チーフ職に1名登用している。	今後も管理職への登用も含め積極的に対応していく。	7月～3月に副館長が女性で1名の女性管理職を配置。	3月末で副館長が退職したため、管理職は全員男性に戻った。さらなる問題意識の共有が必要である。	女性管理職の積極的な配置、登用は公的機関の責務であり、改善の努力を求めたい。	
(サ)	(ワークライフ・バランス)仕事と育児・介護等の両立支援制度を整備し、推進している。	支援制度は整備済みであり、学芸員1名が短時間勤務制度を利用中である。	引き続き、職員に制度を周知し、利用の促進を図っていく。	劇場担当職員に該当者はいない。学芸員に1名短時間勤務制度を活用している職員がいる。	制度について、内容や実態の共有・啓発を進めていく。		
(シ)	(コンプライアンス順守)情報セキュリティをはじめ、各種コンプライアンスの順守規定を策定し、必要な研修を行っている。	全職員が特に情報セキュリティの重要性を認識するとともに、各種規定に基づき行動している。	e-ラーニング等フレキシブルな労働環境に対応した研修会を実施し、あまねく職員が法令順守において必要な知識を持てるような体制を整える。	情報セキュリティについての研修は未実施。	未実施の事項が多いため、コンプライアンスの遵守徹底及び教育について、体制作りが必要である。管理職が主となって知識を得る機会を設けていく。	管理職が率先してコンプライアンス遵守に取り組んでいただきたい。	
(ス)	(ハラスメント防止対策)職場内及び創作現場におけるパワー・ハラスメント、セクシュアル・ハラスメント等防止のための指針等を策定・周知し、必要な研修を行っている。	高知県文化財団としてハラスメント等防止を組織の最重要事項と位置づけて、指針の策定・周知、相談窓口の設置に取り組んでいる。	県の策定する指針を遵守するほか、e-ラーニング等で新しい知識を取り入れ、ハラスメントを起こさない環境の醸成に取り組む。	財団職員にかかる研修としてハラスメント研修を実施し、全員が参加したほか、相談窓口についての情報掲出を実施。	ハラスメント研修を実施できたことは評価できると考える。単発の実施にとどまらないよう、継続的な意識づけの機会を検討する。	ハラスメントに関しては、継続的に学びの場が持たれることが望ましい。	
(セ)	(適正な契約事務)アーティストやスタッフと適正な契約書を交わしている。	相手方と信頼関係を構築した中で、適切にコミュニケーションをとりながら、契約を交わしている。	文化庁の策定するガイドラインを元に、専門家の指導・助言を仰ぎ、アーティストと適正な契約を締結する。	公演事業に出演するアーティストとはすべて契約書を取り交わした。	アーティストと、きめ細かなコミュニケーションを取りつつ、適正な契約事務を行うことができた。	公的機関としての責任を果たしており、引き続き尽力されたい。	

4. 総評

・ 団体の自己評価

本年度、当館は6年ぶりに劇場・音楽堂等機能強化推進事業に取り組むこととなり、複数の助成事業を展開する中で、館としての運営力や企画力の再確認と強化を図る貴重な機会を得た。いずれの事業も要項に則り適切に実施し、概ね計画通りに進行ができた。とりわけ、事前に目的と期待効果を可視化し、具体的な指標を設定したことにより、担当者一人ひとりが事業の方向性と意義を自覚しながら運営を行う体制が整った。たとえば、事業計画に応じたチケット価格の見直しや広報戦略の策定である。 なお、来場者の反応や数値的成果については既報の通りであるため、ここでは特に要望書に記した公演事業における評価指標との対照および、事業実施を通じて得られた組織内外への波及的な影響について言及したい。
【公演事業の指標における成果】 全公演事業で、来場者の年齢・居住地などの属性、感想のヒアリングをアンケート形式で実施したほか、SNS、地元メディアでの取り上げ数を中心に波及効果と成果を検証した。地域・アートファンに寄り添いながらミッションに基づいた展開を重視した。
公－1：様々な年齢層が集う、広場となる公演づくり 家族での来場を主軸に置きながら、多様な層が入り交じることを対象としているため、来場者の年齢構成が40～60代を中央値としながら県内のあらゆる層にとってアクセスしやすい事業展開を目指した。狙いよりも高年齢の層の来場が多い結果とはなったが、プレビュー公演では専門学校の団体鑑賞で初めて来場した若年層を多く獲得することができた。
公－2：県民に届く情報発信・若年層への訴求 来場者がアーティストや今回のプロジェクトを知り、最終的に公演へつながることを意図していた。特に、若年層が劇場に関心を持つことを意図している公演であるため、SNS等、若年層の目に留まる広報媒体での告知を重点的に行った。広報面では、前バプで高知新聞、公演レビューを大阪発信のウェブマガジンで発信された。高知で生まれた作品が長期アウトカムとして世界に発信されることも計画されている。
公－3：県内外への情報発信・質の高い事業への注目 ロームシアター京都からの巡演ということもあり、本作品を通じて高知県立美術館ホールの取り組みを広く発信することを企図した。県外からの来場者は想定には達しなかったが、よさこいなど熱狂的なダンスを好む傾向のある県民には高い支持を得、早くも再演希望の声が上がった。また世界から評価が高まりつつあるアーティストが来高したことで、高知県立美術館ホールが「世界の窓」となっていることを広く印象づけられた。
【組織内外への波及的な影響】 ・職員の意識変容と組織内連携の深化 評価という概念に対しては当初慎重な姿勢も見られたが、研修や芸文振のPOIによる視察・助言などを通じて、「評価は事業の価値を社会に伝えるための有効な手段」であるとの認識が共有され始めた。複数事業が並行する中で、他部署との連携や進行状況の情報共有が自然と生まれ、結果として組織全体の風通しが良くなり、柔軟な対応力も高まった。
・アーティストとの共創プロセス ある事業では、レビュー掲載を評価指標の一つに設定していたが、その意図をアーティストと共有したことで、レビュー（レポート）を書きたいという声があると紹介いただけた。他にも、助成交付額の変更に伴い事業規模の見直しが必要となった場面では、アーティストと共に予算や内容の再構成を行い、共創的なプロセスを実現することができた。事業運営には様々なやり方があり、このような事例がいつでも通じるわけではないが予算や評価を含め事業そのものをアーティストと一緒に組み立てる機会を得られた経験は、遠方のアーティストと信頼を築きながら協働するための貴重なモデルケースとなった。
・業務連携を促す環境づくり 助成事業ならではの申請・報告業務が複数発生したが、共通する管理手法を共有することで、事業担当者以外も互いの業務に関心を持ち、自然な形で協力し合う場面が増えた。こうした偶発的な連携の積み重ねは、組織全体の文化醸成につながる重要なプロセスであり、助成事業がもたらした大きな副次的効果であると感じている。
・継続性を見据えた視座の醸成 本事業の実施を通じて、「文化事業を単年度で捉えるのではなく、継続的な営みとして位置づける」視点が組織内に浸透しつつある。年度ごとの報告においては、どうしても短期的な成果指標にフォーカスせざるを得ない面もあるが、その過程で「今年の成果は、過去の蓄積の上に成り立っている」「継続することで見えてくる成果もある」といった中長期的な視座が芽生えたことは、大きな前進である。
既に次年度の同事業にも採択をいただいており、今年度得られた知見やつながりをもとに、より計画的かつ柔軟に事業を展開していく準備が進んでいる。公的助成を通じて得た多様な学びを、今後は当館の持続的な文化振興の基盤として定着させていきたいと考えている。
今後も、地域における創造と発信の拠点として、文化芸術が人々の暮らしに自然に根づき、広がっていく環境を整えるべく、引き続き工夫と挑戦を続けていきたい。

・ 所見

◇四国の決してアクセスの良い地域とは言えない場所にある施設が、世界とダイレクトにつながり、長年先鋭的な公演事業を展開してきた点は、当該施設の最大の特長である。同時に、県内の子ども達に良質のアウトリーチ事業を行っていることが把握できた点が、今回の調査や評価における収穫であった。
◇人口65万人の高知県にある美術館が、展覧会だけでなく国際的な舞台事業を長年実施していることを、今後も機会を捉えて発信することを望みたい。
◇母体が美術館という収蔵や研究を主とする施設であり、組織文化が異なると思われるが、今後は大型の公演事業だけでなく地域住民が参加できる普及啓発事業等を柔軟に実施すると、ターゲットである若年層の呼び込みにつながると思われる。組織全体を巻き込んだ議論が必要になるだろう。
◇令和6年度の助成事業の成果と組織内外への波及効果は、総評に記述されている通りしっかりと自己分析されている。特に組織内外への波及効果については貴重な報告であり、劇場とのコミュニケーションの重要性を再認識した。
◇また、意見交換等で伝えたとおり、高知県で同じく公演事業を行っている「高知県立県民文化ホール」（指定管理者：高知県立県民文化ホール共同企業体）との役割分担やすみ分けを意識的に行い、連携できる部分は協力するなどし、両者が持ち味を発揮していただきたい。また、県内市町村立の文化施設や民間のアート関係団体等との協力関係を強化し、高知県の文化芸術環境をともに手を携えて発展させていただきたい。